

The Gallery voice

NO-57

編集・発行 / 画廊沖縄 〒901-1114 沖縄南風原町神里 373 TEL / FAX(098)888-6117 / 2014.5.10
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa Japan www.galleryokinawa.com

モウ、シンダフリハヤメロ！

金城 満

窯に瓶を入れ、温度と時間を変えて熱すると原形を留められなくなる。

ある温度までは何の変化も見せない瓶が、一端形が変化し始めると一気に歪み、陥没し、へたってしまう。さらに温度を上げると液化化してガラスの塊になり最後は平板になる。瓶は窯内で直立や横向きなど置き方を変えると、全く意図しない形になるものがある。シリーズ「楽園」はこの方法で作った瓶の立体・平面作品、メッセージ T シャツで構成されている。立体作品は窯から出した歪んだ瓶の姿。平面作品は、瓶が薄いガラス板に置かれた画面構成である。通常の静物画などの画面構成とは異なり台座の下に光源があり、形が下から浮かび上がる。写真のネガを確認する時に使用するライティングテーブル同様、焼き付けられ反転した現実世界を映し出す装置である。そして箔の貼られた背景の輝く闇が、歪んだ瓶を浮かび上がらせる。またメッセージ T シャツでは歪みをまとうことでの、疑問の身体化を図った。

さて、シリーズ「楽園」を、現在の日本または沖縄の状況に重ね合わせてみる。ゆるやかに湾曲し歪んだ瓶の姿は、原発問題や基地問題同様の、矛盾した骨格を内包している。原発は日本の辺境に散在し、電力需要は都市部に集中する。基地は沖縄に 7 割が集中し、安全は沖縄以外に 7 割以上保障される。そして危険度は常に命に関わる、強く高いレベルで集中させられている。仕方無さなのか、見返りなのか「驚くべき立派な内容」が提示され、驚くべき立派な理解の求め方が今も続いている。安全保障とは誰に何を保障しているのだろうか。執拗に圧力をかけ続ける権力は時間、金、人の要素を組み合わせ、手を変え口を変え、巧みな手法を見せ続けている。瓶が割れない様、ゆるやかに歪めていく。まさに匠の技である。

瓶は、その圧力から逃れようとする意思や方向性はありながら、迎合の誘惑と闘いつつ、進むべき道を開くドアノブを握る。しかし匠によって既に細工され空回りするドアノブは、何万人が集っても、未だに空回りするだけである。この報われない状況の無力感は、やがて楽園の擬死(ぎし)状態を招くのではないかと考えてしまう。擬死とは、外敵に襲われた動物が行う行動や反応の類型で、動かなくなってしまうこと、俗にいう死んだふりである。楽園が危機的な状況に陥った時に、権力からは「想定外」と一掃され、終わるだけだろう。楽園人(らくえんびと)が擬死を演じる危険性はあまりにも大きい。



「楽園人」 180×60cm 桐板・顔料・膠・箔・油彩

あるべき姿、原型を留める感覚は、以外にも鈍感である。楽園ではぬるま湯が熱湯に変化するのにも気づかないかもしれない。かつて高田渡の歌に、「値上げ」というのがあった。「値上げはぜんぜん考えぬ」から始まり、以下の様に次々変化していく。「～はありえない、おさえない、認めない、今ではない、さけたい、せざるを得ない、検討中である、時期が早すぎる、時期は考えたい、消極的であるが、やむを得ない、ふみきろう」(作詞：有馬敲)である。これも一種の政治的圧力変化で、匠の技と言える。ましてや消費税 8%になった今、実感を持って聴こえてくる。2014年、原発や基地そして改憲と、次々かけられる圧力に対して、警戒心を怠ってはいけぬ。そして楽園人に告ぐ「モウ、シンダフリハヤメロ！」。そう言う私も、この楽園の住人の一人である。

(きんじょう みつる / 美術家)

問いかける 記憶と状況

仲嶺 絵里奈

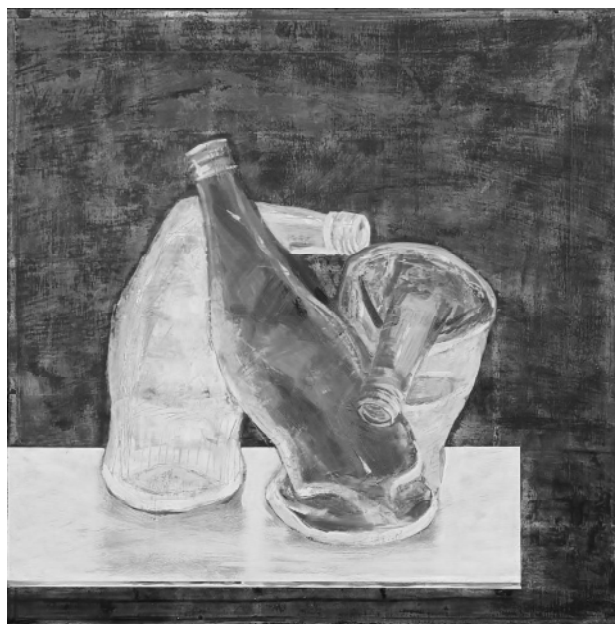
強いと思っていたものが、いとも簡単に侵され、自ら崩壊していく。むしろ、自覚がないままに崩壊させられたといっても良いのかもしれない。金城満氏の作品、シリーズ「楽園」の平面作品「Happy End」には、思い切り割れることなく原形をとどめつつも軟化していく瓶の姿が描かれている。空間に現れたガラスの板に整然と横一列に置かれた瓶の存在は不安定であり危うい。一升瓶の首どうしを赤い紐で繋げた作品は、右に左に傾く瓶を一つの紐で統制をとるかのように繋がれている。また、滑り落ちそうなガラス板の上で瓶同士が絡み合い、落ちそうで落ちない宙に浮いているようにも見える姿を描いたものもある。

作家はこれまで表現行為をとおして沖縄戦について向き合う参加型のアートプロジェクト「石の声」(1996)や「鉄の記憶」(1999～2000)や、最近ではシリーズ「免疫」(2012)といった絵画作品や音楽・映像作品を発表している。このシリーズについて私はかつて「沖縄が抱える問題とその問題がなかったと思えるような日常生活の狭間の中、作家自身がどのように反応しているのか。それを、身体感覚という人間のもっとも本能的な部分の反応を表現することで、見るものに訴えかけていた。自分の感覚さえも揺れ動かされるもどかしさは、まさに沖縄の抱える問題に対して免疫のついてしまった者の感覚を身体内部から破壊していた。」と評したことがある。作家は常に沖縄戦がもたらした当時の様々な記憶や感覚を呼び起こし訴えかけ、また、沖縄戦後の現実社会を問いただすような問題を提起し続けてきた。

今回展示されている一升瓶から栄養ドリンクまで大小様々な瓶をそれぞれ針金で縛りつけ、その後熱を加え変形させた作品群は、沖縄戦の遺品である熱で変形した日本兵の水筒やセルロイド製の品々を思い出させた。硬い針金によって縛られ、寄り添い、身動きが取れないうごめく人の姿のようにも見える。がんじがらめに縛られたその結びを解くことはできるのだろうか。仮に解くことはできても、元の姿に戻ることはできるのであろうか。失われた本来の形態、元に戻る可能性を見いだせないままに存在するその姿に、今の沖縄の現状が見え隠れする。作家により戦火を「疑似体験」させられた瓶は異様にそこに立ち現れる。それらは互いが互いを支えるように痛々しく存在している。

基地があって当たり前前の時代に生まれた1979年生まれの私には、基地がないこと自体が想像できない。その存在を否定することなく、また受け入れる感情もないま

に、宙ぶらりんのまま共存することへの矛盾、これまで闘ってきた多くの先人たちのことなど考えることなく日常を過ごすことが出来るようになってしまった「沖縄」で育った世代である。沖縄戦の現場を表す数々の遺品と接する度に現実として起こった出来事について想起してきた。また、建物一つ遺されておらず、クレーターのようになった爆弾の跡だけが残るまっさらな真っ白の何もない沖縄の姿も知っている。想像することも困難である沖縄戦や終戦直後の姿は、写真に写されたイメージやモノの持つ記憶をとおしてそれぞれ別々の出来事として理解してきた。



「苦渋の甘い汁」 60 x 60 cm 桐板・顔料・膠・箔・油彩

作品は、これまでイメージし、知っていたはずの感覚とはまた違ったリアリティーを持って訴えかけてくる。見るものは瓶の姿をとおして疑似体験するかのような感覚に陥る。この感覚に加え、さらに沖縄の人々が体験し、記憶として継承されてきたものが途絶える現実、間接的に伝えられ、隠蔽されてきた基地被害の現実、潜在的に在り続ける不快感や違和感をも伝わってくる。沖縄の特殊な現状に鈍感になってしまった人々に一石を投じるような作品の数々である。そこには、作家の沖縄の現状に対する叫びや絶望を通り越した中での諦めが感じられつつも、それでも沖縄という土地のもつ記憶や状況の中で生きなければいけない自分自身の姿をも見え隠れする。どうしてこれが「楽園」なのだろうか。「Happy End」と言ってしまうと良いのだろうか。作家自身を含めた沖縄の今を生きる私達へ作品は問いかけている。

(なかみね えりな / 写真史研究家)

不ピンなり

- 誰がこんなことをしたか！！ -

田場 裕規

古語には「ふびんなり」という形容動詞がある。一義として、「都合の悪いこと。また、そのさま。不都合。ふべん。」(『日本国語大辞典』)。二義として、「不憫・不愍」とも書くが、あて字) (1)「かわいそうなこと。気の毒なこと。また、そのさま。」(2)「かわいいと思うこと。愛憐の情を感じること。また、そのさま。」(『日本国語大辞典』)

不都合極まりない形状の瓶たちは、人格を持ち始めた。針金で拘束された瓶たちは、語り始めた。不都合な形状の瓶たちは、呪い始めた。二義の「かわいそうなこと...」や「かわいいと思うこと...」は、まさに二義的なものであって、当事者性を失って、一步引いて見た時に現れる。恐らく、不都合な状態が「愛憐の情」に変容するのは、不都合になった過程や時間の経過を見ない時に起こるのだろう。呪われていることも知らずに、ひたすら「愛憐の情」を保持し続けるのは、現代における「何か」に似ている。

「呪い」は始まっているのだ。呪われるのは誰か、見当もつかないとウソブイテいる人がいるのであれば、「それはあなただ」ということになる。そしてまた瓶を論ずることになるとは、つゆも思わなかった筆者自身も呪いを受ける一人なのである。「誰がこんなことをしたのか！！」。そう怒鳴りたくなるのを必死になって抑えて、不快な形状を見つめなければならない。その瓶によってなされたアート体験は、「何か」の疑似体験である。お分かりだろうか。なにも、なぞなぞやクイズを解き明かせと言っているのではない。不安定な形状の瓶が、薄いガラス板に並べられ、一触即発の微妙なバランスで存在することを、「安定」と見るか、「不安定」と見るか、それは見る者しだいであることに違いないが、瓶たちは「呪い」の肢体を私たちに向けていることを忘れてはならない。

沖繩の「状況」の読み方は、一義的に読むか、二義的に読むかによって、出現する問題は異なる。多くの人びとは二義的に読む手だてしかなく、「呪い」に気付こうとはしない。二義的世界がのさばり貧弱な「愛憐の情」だけが残されるのであれば、「呪い」の連鎖は止まることはない。これは、単に言論によって沖繩の状況を理解したものだけが、「気付く」という営みではない。むしろ言論という手段をもってしても二義的世界で生きている人は、昨今多くて、鼻をつまみたくなる。

シリーズ「楽園」と銘打たれた企画について、金城満はこのアート体験の当事者であるかもしれないが、「だれ

がこんなことをしたか！！」と彼に罵声を浴びせる人がいたとしたら、その人は二義的世界に生きる人であるはずだ。あるいは、作者 金城満 が創造した新しい世界だと理解した人も二義的世界に生きる人に違いない。目の前の「呪い」を忌避することのみ拘泥するものは、まさに「呪い」に気付かない人ということだろう。当事者性の欠如とえばよいだろうか。



「楽園の肖像6」 19 x 19 x 20 cm ガラス・針金

福島第一原子力発電所の廃炉に向けて、科学技術を結集しようという動きがある。それは、「呪い」を鎮めるための動きである。核燃料の取りだしには、ロボットが利用されると報じられているが、我々には、本当にその「呪い」を鎮める意志があるのだろうか。原子炉を擬人化してみれば、その「呪い」の本質に気付くだろうから、擬人化して考えてみたい。都市生活の基盤としての電気の供給インフラが整備され、安定的に電力を供給する手段として原子力力が選ばれた。夢のような電力供給システムの恩恵に与ったものは多いはずである。しかし、今、その原発に対して向けられる忌避のエネルギーは恐ろしい程高まっている。「だれがこんなことをしたか！！」と原子炉に怒鳴るのもお門違いである。むしろ原子炉の「呪い」は全国民が拝み倒して、労って、心から祝福して鎮めなければならないのではないか。「だれがこんなことをしたのか！！」といえば、それは、「私」がやったのだと全国民が言わなければならないし、言えなければならないだろう。沖繩の「状況」もしかり。「だれがこんなことをしたのか！！」。不ピンなり。

(たば ゆうき / 沖繩国際大学総合文化部准教授)

MITSURU KINJO



金城満について

少し肌寒さを感じる春季の午後、金城氏の制作現場を訪ねた。室内ではイーゼルに掛けられた描きかけの画面12点が出迎えた。下地に銀箔が貼られ、更にその上から油絵の具の描写、鮮やかな色彩と奥深いマチエール。それで完成かと思った。傍目からはこれで十分に絵画として成立しているはずだが、金城氏は手を止めない。納得するイメージが浮上するまで、何度も桐板のキャンバス上に、描き、貼り、塗り、削り、貼り、描き、削りをくり返す。私の目は納得しているのだが、彼の身体感覚を介したリアリティの表出に至ってないのだろう。金城の画面への執念がみえる。

更に、モノクロームの鉛筆デッサン20数点が片隅に重ねられていた。手にとって、一枚ごと丁寧に透明なシートに納められた作品を取り出し、しずしずと眺め入った。厚手のボードが鈍く黒光りするほど鉛筆で塗り固められている。金城氏の大学を卒業した頃、初期のドローイング作品に感動したことを思い出した。彼曰く、真っ白な画用紙を、鉛筆で紙面全体を塗りつぶし、更に柔らかい布でなめし鉛色になるまで下地作りをする、それから消しゴムで描く。何？「消しゴムで描く？」金城氏のこの既成概念に囚われない、自由自在の発想がとてもクリエイティブだ。この逆の視点、彼の頭の中がどのようにになっているのが見えるものなら覗いてみたいものだ。

更に、部屋の一角の床に目を向けると、さまざまに変形した大小の瓶があちらこちらに散在していた。「何という事だ、これは一体」その変わり果てた姿に一瞬言葉を失った。「どうして？何があったのだ？」針金で縛られ首がうなだれているもの、吊されたもの、原形を止めない姿、色の違う3個の瓶がへたり込みながら、支え合って立っている。かと思うと、透明な小瓶たちがかすかに歪みながら、舞台上エレガントにカンカン踊りをしている。その在りようは悲劇と喜劇が混在して見える。いつの間にか、瓶の姿が「人間」に見えてきた。ハンマーでたたき、明らかな暴力による変形した姿ではない。時間とともに内部から、又は外部から「ある力」によって変形したことが想像される。それらに付きまとう大気の温度（状況）と時間が伴って形成されたのか？瓶の形をとどめつつ、その歪な形はとても正常とは思えない。金城氏の瓶「楽園の肖像」の作品群はその奇妙な姿ゆえに痛々しさを伴って返ってくる。

金城氏はなぜこのような「姿」をさらけ出すに至ったのか。正確な「記憶の伝達」が薄れ、「あるべき未来像」が共有できないもどかしさか。危機的状況を感じ、それを危惧した結果だと想われるが、どうだろうか。今日の社会状況に「我慢できない」を超えた絶対領域に至った作家の独白ではないだろうか。作家自身が本誌（GV57号）で述べるように、「擬死」「モウ、シンダフリハヤメロ！」と声が出るのも無理がない。

さて、今年の通年企画は「状況— Identity」と銘打った。戦後70年、日本化42年、沖縄の米軍基地、自衛隊基地を巡るさまざまな問題は政治の現場である。同時にその地域住人の文化と人権の問題をも内在している。あの島ぐるみの闘争を想起させる「オール沖縄」の声はどこへやら。この沖縄の現実、「尊厳」を踏みにじるような日本政治の圧力。恫喝され複雑な表情で同意した5人の国会議員。「よい正月を迎えられる」と新たな基地建設の「承認」を表明した沖縄の知事。彼らは本当にウチナンチュだろうか？。彼らの心性が疑わしい。その一方で、海外の著名人の抗議が相次いだ。日本本土の人はどのような認識だろうか？。当然沖縄在住のヤマト人の居心地も良くないだろう。金城満氏のアート作品は強烈に問いかける。

（上原誠勇 / 画廊主）